

植物
防疫
講座

虫害編-16

斑点米カメムシ類の生態と防除-1

—カスミカメムシ類—

龍谷大学 農学部 ^ひ樋 ^{ぐち}口 ^{ひろ}博 ^や也

はじめに

玄米の表面の一部または全面が着色している粒を着色粒と呼び、着色粒はイネの登熟期に玄米の表面に付着した微生物、あるいは害虫の食害部や吸汁孔から侵入した微生物が繁殖することによって生じる。我が国では、玄米中の着色粒の混入率によって米の等級は異なり、混入率が0.1%をこえると2等米、0.3%をこえると3等米、0.7%をこえると規格外となる。着色粒のなかでも、カメムシ類の吸汁により表面に黒色あるいは茶色の食害痕ができた玄米のことを「斑点米」(図-1)、斑点米被害を引き起こすカメムシを「斑点米カメムシ」と称している。

1970年代に入り、米の品質重視から斑点米被害が浮上し、ホソハリカメムシ *Cletus punctiger*、クモヘリカメムシ *Leptocorisa chinensis*、ミナミアオカメムシ *Nezara viridula* 等、イネの穂を吸汁し斑点米被害を引き起こすカメムシ類が問題となった。しかし、1980年代中ごろ

から、イネよりもイネ以外のイネ科植物を好むカスミカメムシ類が重要視されるようになり、特に2種のカスミカメムシ、アカヒゲホソミドリカスミカメ *Trigonotylus caelestialium* (図-2)とアカスジカスミカメ *Stenotus rubrovittatus* (図-3)の増加傾向が顕著となった。カスミカメムシ類の生態的特徴として、多化性で年に数世代を経過する、牧草地などで繁殖するため農薬の影響を受けにくい、イネへの加害時期により被害症状が異なる、植物体の葉鞘内や穎花内に卵塊で産卵するため天敵の影響を受けにくいこと等が考えられる(林, 1997)。



図-1 斑点米



図-2 アカヒゲホソミドリカスミカメ成虫



図-3 アカスジカスミカメ成虫

Ecology and Management of Rice Leaf Bug, *Trigonotylus caelestialium*, and Sorghum Plant Bug, *Stenotus rubrovittatus*, Causing Pecky Rice. By Hiroya HIGUCHI

(キーワード: アカヒゲホソミドリカスミカメ, アカスジカスミカメ, 斑点米, 生態, フェロモントラップ, 防除要否)